

○吉澤 智恵*,佐藤 文子**

(*上越教育大・院, **上越教育大)

【目的】 家庭科教育においてよりよい人間関係を築き、維持する能力の育成が求められている。そこで本研究では、家庭科履修後の大学生に着目して、自己意識と人間関係調整能力の実態を明らかにすることを目的とする。

【方法】 男女共修で家庭科を履修した大学生を対象に「自己意識」、「家族とのかかわり方」、「友人とのかかわり方」について質問紙法によりアンケート調査を行った。

【結果】 ①「自己意識」では、「自分自身についてよく反省する」、「自分の立ち居ふるまいが気になる」等、「家族とのかかわり」では、「私は家族に対して臆病で逃げ腰である」、「私は家族のいうことに無関心な方だ」等、「友人とのかかわり」では、「私は友人と争うことが多い」、「私は友人のいうことに無関心な方だ」等の項目において、高い割合を示した。②男女の比較において、「自己意識」では、「すぐ当惑してしまう」、「出かける前には必ず、鏡で自分の姿を見る」等、「友人とのかかわり方」では、「私は友人と争うことが多い」、「私は人生は闘いの場であり、勝利者にならなければならない」と思う等の項目において両者間に有意な差が認められた。③特徴的な因子として、「自己意識」においては、「他からの評価の意識」、「自己省察」等が、「家族とのかかわり方」においては、「客観的なかかわり」、「家族の中の個の確立」等が、「友人とのかかわり方」においては、「友人からの評価」、「かかわりの否定」等が抽出された。